ミニ情報

街路樹の枯死誘因

札幌市西区山の手通りの市道沿いに 690本のナナカマドが，昭和43年に植えられた。春から夏には，白い花と緑陰が，秋には，紅葉と赤橙色の実が市民を楽しませている。だが，昭和50年頃から徐々に枯死症状がみられ，昭和52年には，69本（10％）の枯死木が生じた。

症状は，開花後の７月上旬頃から次第に樹勢が衰弱し始め，９月上旬には，緑の葉が茶褐色に変り枯死が目立ってきた。枯死木には，いずれも，除雪機械などの接触跡を誘因とする，胴・枝枯性の病害やカイガラムシの発生がみられた。これらの枯死木（４本）と健全本（１本）について，植桝の内部や根の状況を比較した。

植桝は車道に平行して，縦10.7×横0.9×深さ1.0ｍで，約１㎥の土壌が入るように設けられているが，枯死木は土壌の量がいずれも約0.39㎥（深さ40cm）で，その下は瓦礫によって占められている。内部の底・側壁面は瓦礫混じりの土砂によってさえぎられているため，直・側根の伸長が抑制されて，一部に根腐れや根がらみの症状がみられた。これらの根株を切断したところ，断面の約40％に腐朽がみられた。また，健全木は土壌の量が約0.86㎥（深さ90cm）で若干の腐植質が含まれており，底・側壁面とも瓦礫などが少なく，根の拡張や伸長状況も良好で根腐れなどの症状もみられなかった。

（樹芸樹木科　斎藤　晶）